深い学びのために
学習のポイントの解答例

1　死んだ蜂について、「地面へ流し出されたことであろう」（一九九・11）「どこかでじっとしていることだろう」（一九九・12）「死骸はそこにじっとしているだろう」（一九九・13）と推量で語られていることと、ねずみの死の場合の描写を対比し、両者への筆者の向き合い方の特徴を考えてみよう。

【答】　問いに挙げたように、蜂については死ぬ瞬間も見ておらず、死んだ後のことも推測でしか語られていない。それに対して、ねずみの死は、「逃げようとする」（二〇一・2）、「はい上がろうとする」（二〇一・3）、「前足をかけた。…つかえた。…水へ落ちる。…助かろうとしている」（二〇一・6）というように、現在目前に起ころうとしている。蜂の死が自分の想像の範囲であることが、死への親しみをもたらしているが、実際に目にする死は、圧倒的な衝撃を与え、「想像できない」（二〇二・14）の直後に「…だったに相違ない」（二〇三・1）と述べるように、筆者の考えの道筋を混乱させている（「学習のポイント」4も参照）。

▼ポイント▲　「死」という概念については、抽象的・想像的に思考することで得られるものと、実体的に思考することで得られるものでは、位相が異なる。筆者の考えもその両者を含んでいることを、表現から理解する。

2　動物の死をめぐる三つの出来事に対し、筆者はそれぞれ死がどのようなものだと感じているか、本文に即してまとめてみよう。

【答】

①蜂の場合
「いかにも静かな感じを与えた」（一九九・6）
「寂しかった。しかし、それはいかにも静かだった」（一九九・7）
「いかにも静かであった」（一九九・14）
「その静かさに親しみを感じた」（一九九・15）

②ねずみの場合
「ねずみが殺されまいと、…自分は寂しい嫌な気持ちになった。あれが本当なのだと思った」（二〇一・14）
「ああいう動騒は恐ろしいと思った」（二〇二・1）

③いもりの場合
「いもりにとっては全く不意な死であった」（二〇五・6）
「かわいそうに思うと同時に、生き物の寂しさをいっしょに感じた。」（二〇五・8）

蜂の死を見て、死を静かで近しいものとさえ感じたが、ねずみの死では、状況や感情がいかなるものであっても、生きようと努力し続けるのが生き物の本質だと感じた。いもりの死では、死が偶然に左右されるものだと感じた。

▼ポイント▲　偶然に出会った出来事を描いているようでありながら、死についての異なる体験が選ばれ、思考が深まっていく巧妙さを理解する。

3　「眺めていた」（一九八・15）「見つけた」（一九八・16）「見えなくなった」（二〇三・8）など、視覚に関する表現を抜き出してみよう。また、聴覚や触覚など、ほかの感覚に関する表現はどの程度あるかを確認し、筆者が世界を捉える方法の特徴を考えてみよう。

【答】
「見ること」（一九九・7）
「見えた」（二〇三・13）
「見ていた」（二〇四・5）
「見えた」（二〇四・15）　他多数。

視覚は多く表明され、その対象についても多く描写されているが、他の感覚については、例えば聴覚について、擬音語は若干あるが、「聞こえた」というような表現は極端に少ない。触覚についてもほぼないに等しい。筆者が観察したものを描写するところに特色があると考えられる。

▼ポイント▲　世界を感知または描写する他の方法も考えてみながら、志賀直哉の表現の特色を把握する。

4　「いつか」（一九七・16）「何かしら」（一九八・7）「こういう場合」（二〇三・15）など、内容が詳しく説明されない表現を抜き出してみよう。また、「想像できない」（二〇二・14）の直後に「…だったに相違ない」（二〇三・1）と述べるなど、行為や判断の方向が揺れる表現も抜き出し、なぜ、このような表現になるのか、考えてみよう。

【答】
①内容が詳しく説明されない表現
「何かが」（一九八・3）
「どこかで」（一九九・12）
「様子が妙に頭についた」（二〇一・15）
「何となく」（二〇三・10）
②行為や判断の方向が揺れる表現
「そんな気もした。しかし妙に…」（一九八・6）
「自分はそれに対し、…湧き上がってはこなかった」（二〇五・15）

主人公は、「死」というまだ経験したことのないものについて考えている。①は、自分でも理解や説明ができないための表現だと言える。また、想像できることは、自分の知っている範囲内にとどまるので、次々あらわれる新たなできごとや考えによって、その想像が「死」を言い当てていないことに何回でも気づかされてしまう。②は、そのような、知ることができないということ自体を表現しようとするための表現である。

▼ポイント▲　本文は、必ずしも主人公の考えが読者に率直に伝わる文章ではない。そのように書かざるを得ないのはなぜかを考え、文学的な文章が何を追求しているかを考える。

言葉と表現の解答例

1　本文中から擬音語や擬態語を抜き出し、その効果について考えてみよう。

【答】

①擬音語

1　「細長い羽を両方へしっかりと張ってぶーんと飛び立つ。」（一九八・13）

＊蜂の羽音を表す擬音語であるが、まっすぐに飛んでいく様子も表していると考えられる。

2　「カチッカチッと石垣に当たって跳ね返った。」（二〇一・4）

3　「スポッ、スポッと石が水へ投げ込まれた。」（二〇一・11）

4　「石はコツといってから流れに落ちた。」（二〇四・14）

②擬態語

1　「川がにが石のようにじっとしている」（一九七・3）

「どこかでじっとしていることだろう。」（一九九・12）

「そこにじっとしているだろう。」（一九九・13）

「傾斜から流れへ臨んで、じっとしていた。」（二〇四・4）

2　「足を腹の下にぴったりとつけ」（一九八・16）

3　「首を伸ばしてきょろきょろとした。」（二〇一・8）

4　「何となく自分をそわそわとさせた。」（二〇三・10）

5　「ある一つの葉だけがヒラヒラヒラヒラ、同じリズムで動いている。」（二〇三・11）

「いつまでもヒラヒラヒラヒラとせわしく動くのが見えた。」（二〇三・12）

いずれも、特に独自性があるというよりは、一般的、シンプルなものを的確に用いている。これは、読者による状況の再現を容易にする。また、言葉の工夫に読者の目を向けさせるというよりは、表されたできごとそのものに注目させる。

2　「今自分にあのねずみのようなことが起こったら自分はどうするだろう。…それへ行く方法を指定した。」（二〇二・3～6）という部分を読んで、筆者が自身を指すのに使う「自分」の特徴を考えてみよう。

【答】　「自分」はどうするか、自分をある状況において実験的に観察している、あるいは、「自分」はどうしたか、過去を冷静に評価している。「自分はしかし急に元気づいた」（二〇二・13）や「自分は非常に快活になった」（二〇二・13）、「自分はどうだったろう」（二〇二・14）、「その自分はちょっと想像できない。…相違ない」（二〇二・14～二〇三・4）も同様である。

特に「寂しかった」のような直接的な感情の表現と比較したりしながら、「自分」とは、自身を対象化し、突き放した表現であることを考えたい。

▼ポイント▲　小動物に向けられる観察眼が、自分自身にも向けられている。小動物にはなく、人間にはある意識をも、可能な限り観察しようとしていることを把握する。

言語活動の解答例

1　自分の見たものや感じたことを効果的に表現するために、どのような構成上の工夫をしているか話し合ってみよう。

【答】　「自分の見たもの」は蜂・ねずみ・いもりに限らず、城崎温泉の秋の情景ややまめ、川がに、あひる、桑の木などの動植物まで、実に多岐にわたっている。それら全てに「感じたこと」を意味づけることも不可能ではない（例えばあひるは「せわしく足を動かして」おり、その点で「忙しくその脇をはい回る」蜂と接続することができる）。だがそのような細かな象徴性ではなく、直接「見た物から感じたこと」という構成になっているのは蜂・ねずみ・いもりの三つだけである。この三つから感じた「死」に関しての考えが、重複することなく並べられている。この点に「構成上の工夫」が見て取れる。

また「何かが」（P一九八・3）「そんな気もした。しかし妙に」（P一九八・6）といった、直接感じた内容を説明するのでなく、読者に自然と「何を感じたのか」と疑問を抱かせる表現や、「ぶーんと飛び立つ」（P一九八・13）といった平易なオノマトペといった、すんなりと作品世界を想像できるような表現も見て取れる。「見たものや感じたこと」を表現するのにあたり、これらの平易な表現を使うことで、読者をひきいれるという「効果」をここに見て取れる。

このように、この問題は【①「自分の見たもの」「感じたこと」は何か】【②「構成上の工夫」は何か】【③「効果」は何か】という三つの問いに分解して解くことが可能である。仮にこの問題でアクティブ・ラーニング形式の授業を実施するならば、①でＫＪ法を行いつつ、その結果を②や③と合わせたジグソー法の活用が考えられる。

▼ポイント▲　この作品では、起こったことがそのまま並べられているように見えるものの、「学習のポイント」2からは、「死」についての三つの考え方が、重複することなく、深まるように並べられていること、つまり構成的意図が明確であることがわかる。一方、「学習のポイント」4と、「言葉と表現」1からは、あたかも上手な文章を書こうとする意識を放棄しているような、逆の性質も見受けられる。後者によって、前者の人為的構成が意識されることなく、自然に読まれる文章になっていると言える。

（秋山　桂）